

呉市におけるガケ崩れと降雨、地形、土質の因係について

呉工業高等専門学校
同上

正員 石井義明
正員 星健三

1. はじめに 呉市は古くからガケ崩れによる災害が多かったため観測記録もとずく研究報告も多くある。しかしその多くは降雨等の誘因との因係で、土の強さ、斜面の配等の素因を含む総合的研究は少ない。そこで昭和54~56年に呉市で発生した自然斜面のガケ崩れによる災害と降雨の因係と調べることに、地形や土の物理、力学特性がどのように影響しているかと調べた。

2. 用いた資料と調査地域 用いた資料は呉市役所土木課防災係の昭和54~56年までの117箇所自然斜面の崩壊記録である。調査対象地域は呉市全域であるが、焼山、郡原地区の記録は見当らない。よって比較のために隣接する熊野、黒瀬町、東広島市等の地形に関する資料の一部を使用し、力学試験には斜面表層の不攪乱土を用いた。

3. ガケ崩れの発生と降雨、地形、土の力学特性 ガケ崩れに対する降雨の影響はまご土のような砂質土の斜面で当日の雨量の影響が大きいと考えられるため、24時間雨量の強度別ガケ崩れの出現度数と求めると表1となる。これはガケ崩れの発生率と感さがりしやすさが、単にガケ崩れの起こった時の降雨強度の出現率と示しているわけであり、従って相対発生指数と求め比較する必要がある。相対発生指数が表1の出現度数と表2の日雨量(24時間雨量)の階級別出現度数と除したもので、これを求める図1とする。これはより日雨量50mmくらいよりガケ崩れが発生し、100mm以上になると急増することを示す。図中の破線は倉崎が2017所のガケ崩れをもとに得た結果で、呉市の場合にはこれより少なり雨量で多くのガケ崩れが発生するといえる。その原因は呉市周辺の山麓の急峻な場所まで宅地化されていること、風化の進んだ土が急峻な傾斜比の表層を覆っているためと思われる。

表1 呉市におけるガケ崩れと24時間雨量(昭和54,55,56年)

24時間雨量	災害出現度数
25~49mm	3.4%
50~74	0
75~99	47.0
100~124	15.4
125~149	0
150~174	34.2

表2 呉市における日雨量の階級別出現度数(25mm未満は除く)

降雨階級	出現度数
25~49mm/24hr	63.5%
50~74	23.1
75~99	3.8
100~124	7.7
125<	1.9

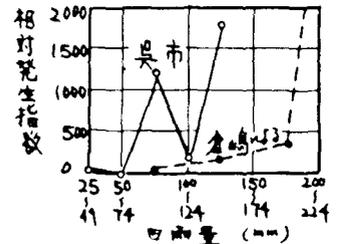


図1 ガケ崩れの24時間降雨強度別相対発生指数

日雨量をもとによく用いる降雨形態として最大時間雨量がある。これについても最大時間雨量別災害の出現度数と降雨の階級別出現度数を用いた相対発生指数と求めると図2のようである。やはり規則的な折線であるが39%以上になるとガケ崩れが急増している。これについても前述の倉崎のデータと比較すると概ね類似した傾向にあるが、道土の研究で最大時間雨量による土砂災害発生限界の下限値は50%と述べてあり、これと比較すると呉市の場合にはかなり最大時間雨量で災害が多発するといえること、図3 日雨量と崩壊発生までの時間と示す地方、地域の地形、地質により差が大きいといえる。

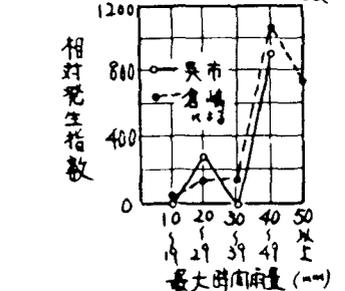
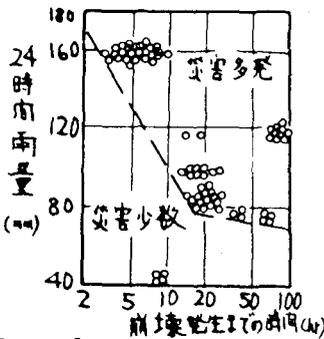


図2 ガケ崩れの最大時間降雨別相対発生指数

ガケ崩れによる災害がいつ発生するかは予測はたへんむづかしが、ここでは降雨開始からガケ崩れの発生するまでの時間と日雨量との関係のプロットした。その結果は図3で、一部はむづかしいが概ね破線の右側の時間の範囲で発生し日雨量の増大とともに発生までの時間が早まり相関性が高いといえる。早いものは降雨開始後3

時間で、遅いものは3日後に発生しているものもある。前、最大時間雨量との関係について調べたがばらつきが大きいため、この点で省略する。

次に累積雨量、3日連続雨量との関係と示す図4となる。ただし崩壊発生までの時間が長いほど連続雨量が多く、逆に時間が短ければ連続雨量が少くなる傾向が崩壊発生となり、一見矛盾している、しかし傾斜角の異なる、縦軸は連続雨量と示すまでの時間で除した平均的連続雨量を用いた、図4の約20%の降雨が3~7時間継続すると災害が発生しやすく、或いは約5%程度の少量であっても10時間以上降り続けると災害が多発することと示している。

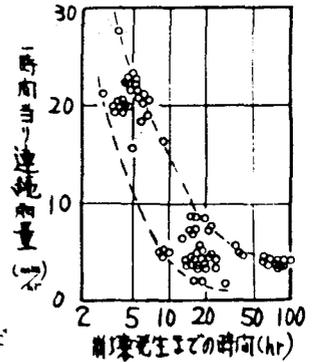


図4 連続雨量と崩壊発生までの時間

土中の水分がある程度以上になると崩壊が発生し、この時の水分は当日の雨量だけでなく前日までの累積雨量、または先行降雨の影響を受ける。先行の降雨量として7日までの累積雨量と示す方法もあるが、ここでは既往降雨指数 (Antecedent Precipitation Index API) を用いた。APIの求め方の説明は省くが、災害発生7日前までの累積雨量の関係から決まる。APIと日雨量の関係と示す図5となる。但し30%以下は無災害のため省いた。図が破綻するよう災害が多発している日とそうでない日の間に明らか差があり、APIと日雨量が既知ならば災害発生の有無をかなり高い精度で推定可能であると示している。また右下りにあり着留水分の増大、APIの増大も日雨量が少なくても崩壊が生じやすくなることを示している。

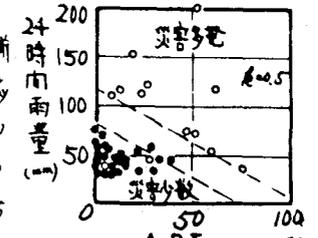


図5 災害発生と先行降雨指数

呉市は崩壊災害が非常に多いのに対し隣接する熊野、熊野町、東広島市は傾斜角が急峻な山麓斜面を構成しているにもかかわらず、災害の規模は小さく、発生件数も数回に少ない。これは呉市周辺の山麓斜面の傾斜角、起伏等の地形特性による影響が大きいためと思われる。そこで1/5000の地形図上でホートン法により平均傾斜角 θ と起伏を求めると図6となる。図中の白丸と黒丸は災害と無関係な呉市周辺、隣接市町村周辺について求めたもので、掛印は呉市周辺の災害発生地区について求めたものである。図は呉市周辺の地形 $\theta=20^\circ$ 以上の所がかなりの数に対し隣接市町村では $\theta=20^\circ$ 以下の所が多く、起伏についても呉市内地区は50m以上、その他の地区は50m以下の所が多いことを示し、呉市周辺山麓地形的に災害が発生しやすくなることを示している。また災害発生下限値 $\theta=12^\circ$ 以上、起伏40m以上であることが示されている。

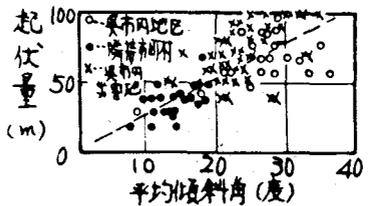


図6 地形の特性と災害の関係

災害発生場所の予測には表層土の工学的性質も知らなければならず、これは77は調査中であるため、ここでは得られた結果の一部、斜面表層土の内部摩擦角 ϕ が含水比とどのような関係があるかについてのみ述べる。供試体は圧密試験用のトリニグリングで採取した不攪乱供試体で、一面を新と作り、種々の含水比に対する値を得るため軟時間或いは2.3日水浸する方法とした。得られた含水比 w との関係は図7である。 w が%増大すると ϕ は約6度減少している。降雨量により比中の含水比はどのように変化するかを目下調査中であるが、比表下10cmの所で約10%の降雨があると w は約10%増大する結果を得ている。従って呉市周辺山麓斜面の表層土の含水比も割合で増大するから、降雨10%で ϕ は約5~6%も急減する可能性がある。

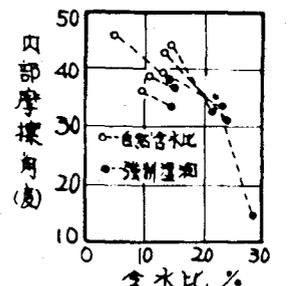


図7 不攪乱土の含水比の変化による内部摩擦角の変化

4. まわりが 紙面の都合で詳しく述べられず、今回得られた結果は広島県が昭和60年度より土流の災害防止のために行っている基準雨量と比較すると、最大時間雨量について5倍当りと思われるが、連続雨量については危険なようである。また呉市役所土木課関係、西脇係長 植吉係長に感謝の意を表し、参考文献 1) 名島 潤、測候時報、40、12、pp.419-445、

(1974、2) 国土庁 国土院 自然災害資料 土流 論文集 pp.111-134、1980、3) 山崎 澄治、地質学、崩壊、土流、広島県版、pp.174-185、4) 中国新聞 (1985年 3月14日) 5) 西脇 幸夫、東海大学工学部 崩壊、土工技術、vol.5、pp.45、1972、(1980、)